

## 主要な参考文献

古今集総索引	西下経一 滝沢貞夫編	明治書院	今昔物語集
古今和歌集	日本古典文学大系	岩波書店	古本説話集
古今和歌集	小島憲之 新井栄蔵校注	岩波書店	大鏡
古今和歌集	日本古典文学全集	岩波書店	新編国歌大観
古今和歌集	日本古典全書	朝日新聞社	古語大辞典
後撰和歌集全积	木船重昭	笠間書院	中田祝夫編監修
後撰和歌集	片桐洋一	岩波書店	橘純一
拾遺和歌集	小町谷照彦校注	岩波書店	日本古典文学大系
後拾遺和歌集	久保田淳 平田喜信校注	岩波書店	岩波書店
後拾遺和歌集総索引	本文・校異・索引・研究	清文堂	武藏野書院
金葉和歌集総索引	編集代表 増田繁夫	清文堂	角川書店
金葉和歌集 詞花和歌集	川村晃生 柏木由夫	岩波書店	小学館
千載集総索引	工藤重矩校注	笠間書院	日本古典文学大系
千載和歌集	滝沢貞夫編	岩波書店	岩波書店
新古今和歌集	片野達郎 松野陽一校注	岩波書店	小学館
新古今和歌集	田中裕 赤瀬信吾校注	岩波書店	角川書店
新古今和歌集	久松潜一 山崎敏夫	岩波書店	日本古典文学全集
後藤重郎校注	後藤重郎校注	岩波書店	武藏野書院
峯村文人	峯村文人	小学館	小学館
新古今和歌集	新潮日本古典集成	新潮社	岩波書店
新古今和歌集	日本古典文学全集	小学館	小学館
歌論集	日本古典文学大系	岩波書店	日本古典文学大系
万葉集	日本古典文学全集	小学館	岩波書店
万葉集	玉上琢弥	角川書店	武藏野書院
源氏物語	源氏物語	角川書店	角川書店

〔平成九年十一月二十九日受理〕

- (2) 「作者になんらかの関係のある動作が予定されているために他に対し制止の意を含みつつ懇ろに願い望む意があると解されるもの」は一八例で二六%。
- (3) 「作者に事象の展開が予想できるために制止の意を含みつ心情的に懇願する意があると解されるもの」七例で九・五%。
- (4) 「作者が心情的に対象と同じような情況にあるために、制止の意を含みつつ他に対し懇ろに願い望む意があると解されるもの」はわずか二例である。
- 3 作者の禁止している対象
- 「人」に関するものが四四首でいちばん多く四六%、「自然に関するもの」が三八首で四〇%、「植物」に関するものが三首、「動物」に関するものが七首、「仏」と「昆虫」が一首ずつで、「人」「自然」を対象にしたものが、九四首中に八二首で八七%を占める。
- 4 部立て
- 春の部が二首、雜体一九、恋一三、秋一二、夏七、羈旅五、離別歌四、補遺歌二、釈教歌三、物名二、冬二首と多岐にわたる。春の部、恋は三三首で四〇%弱である。
- 5 「な……そ」を含む文節
- (1) 「な」と「そ」の間に動詞の連用形をはさむもの七〇例、七三%。
- (2) 「な」と「そ」の間に複合動詞連用形が入るもの一例。
- (3) 複合動詞の間に「な」が入り、そして「そ」が下接するもの一六例。
- (4) 「な」と「そ」の間にカ変の未然形をはさむもの四例。

- 6 「な……そ」を含む文節前後の心情を表わす単語
- 形容詞の連用形（「いたく」「あらく」「たかく」等）を副詞「な」の直前におき、詠み手の心情を強く表現するものが一三例見られる。
- 7 「な+連用形+そ」の「な」の前に「な」をおいたもの一例。
- 〈作者〉〈成立〉〈作品成立の背景〉は紙数の都合で割愛する。
- 昭和五〇年当時、古典学習入門期に使用する文語文法テキストの「な……そ」の項で「禁止の意」の掲載がほとんどで、「懇願的な禁止の意」を付加して説明することを出版社にお願いしたことを想起している。
- 本稿をまとめるに当つて多くの方の研究書、論文等から示唆をいただいた。厚くお礼申し上げる。なお大方のご教示を仰ぐ次第である。

## 八代集の禁止表現（「な……そ」）集約

### 1 「な……そ」が占める割合

歌集名	歌	詞書	全歌数
古今	一五	〇	一二一
後撰	二三	二	一四三五
拾遺	二三	〇	一三二八
後拾遺	二三	一	七一七
金葉	一〇	一	四一五
詞花	三	〇	一二七八
千載	四	〇	一九七八
新古今	一九	〇	一九七八
合計	九〇	四	九五〇三
古今（八）、後撰（九）、拾遺（二）、後拾遺（九）、 金葉（三）、新古今（七）		合計	四〇例

それぞれの歌集中で「な……そ」が占める割合は一%前後である。

### 2 禁止表現の状況

懇願の気持ちを含めて禁止すると解されるもの

古今（一四）、後撰（一四）、拾遺（五）、後拾遺（一一）、金葉 (八)、千載（二）、新古今（二三）	合計	六七例
古今（一）、後撰（二）、拾遺（二）、後拾遺（三）、金葉（三）	合計	二例
詞花（三）、千載（二）、新古今（六）	合計	二七例

「懇願の気持ちを含めて禁止すると解されるもの」は六七例である。

九四例中に「懇願の気持ちを含めて禁止する」と解される用例は六七例で七〇%を占める。『拾遺和歌集』のみ「禁止の意を表わす」用例が上まわっている。作者の禁止している対象が「霞」、「白露」、「女郎花」、「きちこう」(物名歌)等の自然の景物であつたり、「な……そ」の前に副詞「さらに」がくると強い禁止表現になる。

### ○懇願の気持ちを含めて禁止すると解されるものの状況

- ① 作者に苦惱、嘆きの心情、思いやり、あわれに思う心情、切々たる深い思い等があるために、かかわりのあるものに対して制止の意を含みつつ懇ろに願い望む意があると解されるもの

古今（八）、後撰（九）、拾遺（二）、後拾遺（九）、  
金葉（三）、新古今（七）

② 作者になんらかの関係のある動作が予定されているために他に対して制止の意を含みつつ懇ろに願い望む意があると解されるもの

古今（五）、後撰（三）、拾遺（二）、後拾遺（三）、金葉（三）、  
新古今（三）

合計  
一八例

③ 作者の心情が対象と同じような情況にあるために、制止の意を含みつつ他に対して懇ろに願い望む意があると解されるもの

古今（一）、拾遺（二）  
後撰（三）、金葉（二）、新古今（三）

合計  
七例

④ 作者に事象の展開が予想できるために制止の意を含みつつ心情的に懇願する意があると解されるもの

後撰（三）、金葉（二）、新古今（三）

合計  
七例

「懇願の気持ちを含めて禁止すると解されるもの」は六七例である。

① 「作者に苦惱、嘆きの心情、思いやり、あわれに思う心情、切々たる深い思い等があるために、かかわりのあるものに対して制止の意を含みつつ懇ろに願い望む意があると解されるもの」が四〇例を占め、五九%である。

## まとめ

## 1 禁止表現の状況

## 歌一九例

一九例

○懇願の気持ちを含めて禁止すると解されるもの

一三例

① 作者が心情的になんらかの苦境にあるために、他に対して制止の意を含みつつ懇ろに願い望む意があると解されるもの

用例一・二・三・四・五・六・七

② 作者になんらかの関係のある動作が予定されているために、他に対して制止の意を含みつつ懇ろに願い望む意があると解されるもの

用例八・九・一〇

③ 作者あるいは主人公に密接な関係がある上に、事象の展開がはつきり予想できて、さらに心情的に懇願する必要のある場合に用いられると解されるもの

用例一一・一二・一三

○禁止の意を表すと解されるもの

六例

用例一四・一五・一六・一七・一八・一九

2 作者を見ると、よみ人しらずの和歌二首で、残り一七首の作者は、山部赤人（二首）、藤原俊成（一首）、小弁（二首）、慈円（一首）、藤原定頼（二首）、太上天皇（一首）、枇杷皇后宮（二首）、藤原定家（一首）、摂政太政大臣（一首）、祭主輔親（一首）、大僧正行尊（一首）、式子内親王（二首）である。女性の手になつたものは四首である。よみ人しらずの和歌二首は素朴で、率直な心情が詠まれている。

3 部立てについてみると、夏（一首）、冬（一）、羈旅（三）、恋

歌四（一）、恋歌五（二）、雜歌（一）、恋歌三（一）、春歌下（一）、秋歌上（三）、秋歌下（一）、離別（一）、雜歌上（一）、釈教歌（三）。四首の恋歌は「懇願的な気持ちを含む制止の意」を表し、釈教歌は三首とも「動作を禁止する意」を表している。

4 作者が禁止している対象。

十九首中、人（太宰帥隆家、障りのため会いにくい女性、心を寄せている女性、同行の人々、世間の人）に対して詠んだものが五首であるが、「世間の人」をのぞく他の四首の「な……そ」は、「懇願的な気持ちを含む制止の意」を表している。動物（山郭公）、植物（はな桜）に関するものは一首ずつであり、「さ夜枕」に呼びかけたのが一首ある。自然に関するもの（春雨、春の山かぜ、嶺の秋風、秋のはつ風、秋の夜の月、浮雲、菊の上の露、松のしら雪、水のしら波、冲白波、山の雲）が、十九首中に十二首を占め、その割合は約六割三分である。十二首中の十首は、体言止めの技法と重なつて、作者の深い心情が余情となつて表現されている。

5 形容詞「いたし」の連用形「いたく」を副詞「な」の上に置いて詠み手の強い心情を表現しているものが四例見られる。

六 「な……そ」を含む文節

① 「な」と「そ」の間に動詞の連用形をはさむもの 一四例

用例一・二・三・四・五・六・七・八・一〇・一一・一二・一三・一八・一九

② 複合動詞の間に「な」がはいり、そして、「そ」が下接しているもの

用例九・一四・一五・一六・一七

五例

(四) であり、複合動詞の間に副詞「な」が入るもの三例、「な」と「そ」の間に、カ変動詞の未然形が入り、懸詞になつてゐるもの一例である。

### 【新古今和歌集】

用例一 一二〇一 「入道前関白、右大臣に侍ける時、百首歌よませ侍ける郭公の歌 昔思ふ草の庵のよるの雨になみだなそへそ山郭公

皇太后宮大夫俊成」(卷第三 夏歌)

用例二 六八三 「百首歌の中に 此の比は花も紅葉も枝になししばしな消えそ松のしら雪 大上天皇」(卷第六 冬歌)

用例三 九四六 「いそなれで心もとけぬこも枕あらくなかけそ水のしらなみ 権中納言定頼」(卷第十 翳旅歌)

用例四 九四八 「松がねのをじまがいそのさ夜枕いたくなぬれそあまの袖かは 式子内親王」(卷第十 翳旅歌)

用例五 九六八 「摂政太政大臣の家の歌合に、秋ノ旅といふ事を忘れなんまつとなつげそ中々にいなばの山の嶺の秋風 藤原定家朝臣」(卷第十 翳旅歌)

用例六 一二七二 「千五百番歌合に めぐりあはん限りはいつとしらねども月なへだてそよその浮雲 摂政太政大臣」(卷第十四恋歌四)

用例七 一八三三 「嘆く事侍りけるころ、大峰に籠るとして、同行どももかたへは京へ帰りねなど申てよみ侍ける 思ひいでてもしも尋ねる人もあらばありとないひそ定めなきよに 大僧正行尊」(卷第十八 雜歌下)

用例八 一三六八 「君があたりみつゝををらんいこま山雲な隠しそ雨はふる共 読人しらず」(卷第十五 恋歌五)

用例九 一四〇六 「いまはともおもひな絶えそ野中なる水の流れ

はゆきて尋ねん 祭主輔親」(卷第十五 恋歌五)

用例一〇 一二〇四 「待つ恋といへる心を 君待つとね屋へもいらぬまきのとにいたくなふけそ山のはの月 式子内親王」(卷第十

### 三 恋歌三)

用例一一 一二〇 「題しらず 春雨はいたくなふりそ桜花まだみぬ人にちらまくもをし 赤人」(第卷二 春歌下)

用例一二 五〇九 「題しらず いまよりは又咲く花もなき物をいたくなおきそ菊の上の露 権中納言定頼」(卷第五 秋歌下)

用例一三 八六八 「天宰帥隆家下りけるに、扇賜ふとて 涼しさはいきの松原まさる共そふる扇のかぜな忘れそ 枇杷皇太后宮」

(卷第九 離別歌)

用例一四 三一九 「七夕の衣のつまは心して吹きなかへしそ秋のはつかぜ 小弁」(卷四 秋歌上)

用例一五 三九〇 「百首歌たてまつりし時 ふけゆかば煙もあらじ塩がまのうらみなはてそ秋の夜の月 前大僧正慈円」(卷第四秋歌上)

用例一六 一四五六 「建久六年、東大寺供養に行幸の時、興福寺の八重桜さかりなりけるを見て、枝に結び付けて侍ける ふるさと思ひなはてそ花桜かゝるみゆきに逢ふ世ありけり よみ人しらず」

(卷第十六 雜歌上)

用例一七 一九六二 「不偷盜戒 うきくさのひと葉なりとも磯がくれおもひなかけそ沖つ白浪」(卷第二十 祀教歌)

用例一八 一九六三 「不邪姪戒 さらぬだにをもきがうへに小夜衣わがつまならぬつまな重ねそ」(卷第二十 祀教歌)

用例一九 一九六四 「不酷酒戒 花のもと露のなさけはほどもあらじゑいなす、めそ春の山風」(卷第二十 祀教歌)

## まとめ

### 1 禁止表現の状況

歌 三例

○禁止の意を表すと解されるもの

用例一・二・三

2 作者は、平兼盛、一宮紀伊、小一条院であり、よみ人知らずは一首もない。

3 部立ては、春二首、雜上一首である。

4 作者の禁止している対象は、春の山風（用例一）、霞（二）、宮の女房（三）であり、自然に関するもの二首、人に関するもの一首である。

5 副詞「な」の前に形容詞の連用形を置いて詠み手の強い心情を表現している歌はない。

6 「な……そ」を含む文節

① 「な」と「そ」の間に動詞の連用形をはさむもの 一例

② 複合動詞の間に「な」が入り、そして「そ」が下接したもの二例

### 『千載和歌集』

用例一 一〇三「陸奥国にまかりける時、勿來の閑にて花の散りければよめる 吹く風をなこその閑と思へども道もせにちる山ざくらかな 源義家朝臣」（卷第二 春歌下）

用例二 一六八「久我内大臣の家にて旅宿菖蒲といへる心をよめる 宮ご人引きなつくしそあやめ草かりねのとこの枕ばかりは 中納言雅頼」（卷第三 夏歌）

用例三 七二九「大納言重通少将に侍ける時、名立つ事侍けるを、

同じくはまことになさばやといひつかはして侍ければ、よみてつかはしける 遭ひ見むと思ひな寄りそ白浪の立ちけん名だにをしきみぎはを 法性寺入道前太政大臣家参河」（巻第十二 恋歌二）

用例四 一〇〇「従一位藤原宗子病重くなりて、久しうまいり侍らで心細きよしなど奏せさせて侍けるにつかはしける 浮雲のか、るほどにあるものを隠れなはてそ有明けの月 近衛院御製」（巻第十六 雜歌上）

## まとめ

### 1 禁止表現の状況

歌 四例

○懇願の気持ちを含めて禁止すると解されるもの

用例三・四

○禁止の意を表すと解されるもの

用例一・二

2 作者は、源義家朝臣、前中納言雅頼、法性寺入道前太政大臣家参河、近衛院であり、よみ人知らずの歌はない。

3 部立ては、春歌下、夏歌、恋歌二、雜歌上である。四例は歌の中にあり、詞書の「な……そ」はない。

4 副詞「な」の上に形容詞の連用形を置いて詠み手の強い心情を表現している歌はない。

5 副詞「な」の上に形容詞の連用形を置いて詠み手の強い心情を表現している歌はない。

6 作者が禁止している対象は、吹く風（用例一）、宮ご人（二）、言い寄る男（三）、有明けの月（四）であり、自然、人事それぞれ二首ずつである。

7 「な……そ」を含む文節を見ると、「なこその閑」（用例一）、「引きなつくしそ」（二）、「思ひな寄りそ」（三）、「隠れなはてそ」

なやつしそ山吹の花 中納言雅定（巻第一）春部

用例八 八三三「寄<sup>スル</sup>関恋をよめる なこそといふ事をば君がこ

とぐさを関の名ぞとも思ひける哉 源俊頼朝臣（補遺歌）

用例九 八五二「ごくらくをおもふといへる事を よものうみの

なみにたゞよふみくづをもなゝへのあみに引なもらしそ 源俊頼朝  
臣」（補遺歌）

用例一〇 八八八「遠山見<sup>ニルヲ</sup>花といへる事をよめる 人しれずこゝ、

ろをやりて見るはなはたちなへだてそみねのしらくも 太宰大式長

実（巻第一 春部）

用例一一 五五六「甲斐国よりのぼりてをばなりける人の許に

ありけるが、はかなき事によりてなありそと、をい、だしければ」

とりのこのまだかひながらあらませばおばといふものはおい、でざ  
らまし 読人不知（巻第九 雜部上）

## まとめ

### 1 禁止表現の状況

#### 一一例

歌 一一例 詞書 一一例

○懇願の気持ちを含めて禁止すると解されるもの

用例一・二・三・四・七・八・九・一〇

この八例は、作者に密接な関係のある事象の展開がはつきり予  
想できる場合、また作者になんらかの関係のある動作が予定され  
ている場合に、制止の意を含みつつ懇ろに願い望む状況下で用い  
られている。

○禁止の意を表すと解されるもの

用例五・六・一一（詞書）

2 作者は、平兼盛、攝政左大臣、太宰大式長実（三首）、大納言

経信、源師賢朝臣、中納言雅定、源俊頼朝臣（二首）であり、読  
人不知は一首である。

3 部立ては、春（四首）、秋（三首）、雑（二首）、補遺歌（二首）  
(詞書一首)

4 作者が呼びかけている対象は、はるの山風（一）、井での河浪  
(二)、秋のはつ風（三）、秋夜の月（六）、山吹の花（七）、人  
(四)、いかだし（五）、君（八）、仏（九）、みねのくらくも（一〇）、

をばなりける人（一一）。

5 用例二是、「な……そ」の上に形容詞「いたし」の連用形を置  
いて、作者の心情を強く表している。

6 「な……そ」を含む文節  
① 「な」と「そ」の間に動詞の連用形をはさむもの 六例

② 複合動詞の間に「な」がはいり、そして「そ」が下接するも  
の 四例

③ 「な」と「そ」の間に、カ変の未然形をはさむものの 一例

### 「詞花和歌集」

#### 一一例

用例一一四「天徳四年内裏歌合に柳をよめる 佐保姫の糸そめ  
かくる青柳をふきなみだりそ春のやまかぜ 平兼盛」（巻第一 春）

用例一二三「おなじ歌合によめる 朝まだきかすみなこめそ山  
ざくらたづねゆくまのよそめにもみむ 一宮紀伊」（巻第一 春）

用例三二九一「左京大夫顕輔中宮亮にて待ける時、下臍に越え  
らるべしと聞きて、宮の女房のなかに嘆き申したりける返事に、誰  
とはなくて 世の中をおもひないりそ三笠山さしいづる月のすまむ  
かぎりは 小一条院御製」（巻第九 雜上）

# まとめ

## 1 禁止表現の状況

## 一四例

「またき」（用例二・五）、「たかく」（用例一〇）も副詞「な」に上接し、心情表現に好都合である。

## 6 「な……そ」を含む文節

歌 一三例 詞書 一例

○懇願の気持ちを含めて禁止すると解されるもの

用例二・三・四・五・六・七・九・一〇・一一・一三・一四

この用例は、作者になんらかの関係のある動作が予定されている場合、また、作者に密接な事象の展開がはつきり予想できて、さらに、心情的に制止の意を含みつつ懇願する必要のある場合に用いられる。

○禁止の意を表すと解されるもの

用例一・八・一二

2 作者は、源師賢ノ朝臣、大中臣能宣朝臣、藤茂規男、大宮ノ越前、源光成、藤原範永朝臣、馬内侍、藤原統理、大式ノ三位、源相方ノ朝臣、源重之、きふねの明神、少尉藤原義孝、清少納言であり、よみ人知らずが一首もない。

3 部立ては、春（一首）、春下（二）、夏（二）、秋下（一）、別（一）、雜一（一）、雜二（一）、雜三（一）、雜五（四）、雜六（二）で「雜」の部に多い。

4 作者が禁止している対象は、一四首中、中納言定頼、去つて行く男、人、出羽弁、舟人、法師、和泉式部、清少納言と親密な人と人事に関するものが多い。自然に関するものは、春、さくらの花、こがらしの風、秋の月、月と四首、動物に関するものはほととぎすが一首。

5 「いたくな鳴きそ」（用例四、一三）は、形容詞「いたし」の連用形「いたく」を置いて詠み手の強い心情を表現している。

## 一三例

① 「な」と「そ」の間に動詞の連用形をはさむもの  
② 「な」と「そ」の間に、カ変の未然形をはさむもの

「なこそ」

## 『金葉和歌集』

用例一 三二 「天徳四年、内裏の歌合によめる さほひめのいとそめかくるあをやぎをふきなみだりそはるの山風 平兼盛」（卷第一春）

用例二 八〇 「水ノ辺ノ款冬をよめる かぎりありてちるだにおしきやまぶきをいたくなおりそ井での河浪 摂政左大臣」（卷第一春）

用例三 一五〇 「野ノ草帶<sup>ブ</sup>露」といへることをよめる まくずはふあだのおほの、しらつゆをふきなみだりそ秋のはつ風 太宰大式長実（巻第二夏）

用例四 二三七 「はぎをよめる しらすげのま野のはぎはらつゆながらおりつる袖ぞ人なとがめそ 太宰大式長実」（巻第三秋部）

用例五 二五三 「宇治前太政大臣、大井にまかれりけるともにまかりてよめる おほゐがはいはなみたかしいかだしよきしのもみぢにあからめなせそ 大納言経信」（巻第三秋）

用例六 五六九 「月のいるをみてよめる にしへゆくこゝろはわれもあるものをひとりないりそ秋夜の月 源師賢朝臣」（巻第九雑部上）

用例七 六七七 「家の山吹を、人々あまたまうできてあそびける次に、をりけるをみてよめる わが宿に又こん人もみるばかりをり

そ

## 『後拾遺和歌集』

用例一 三「春從東來といふ心をよみ侍ける あつまちはなこそ  
のせきもあるものをいかてか春のこえてきつらん 源師賢ノ朝臣」  
(卷第一 春上)

用例二 一三四「さくら花またきなぢりそ何により春をは人のお  
しむ成らん 大中臣能宣朝臣 (卷第二 春下)

用例三 一七八「つくしの大山寺といふ所にて歌合し侍けるによ  
める 我がやどのかきねなすきそほとゝきすいつれの里もおなしう  
の花 藤茂規男」(卷第三 夏)

用例四 三四〇「山家秋風といふこゝろをよめる 山里のしつの  
松かきひまを荒みいたくな吹そこからしの風 大宮ノ越前」(卷第  
五 秋下)

用例五 四八七「かへし たゝぬよりしほりもあへぬ衣手にまた  
きなかけそまつかうらなみ 源光成」(卷第八 別)

用例六 八六八「侍従のあまひろさはにこもるとき、てつかはし  
ける 山のはにかくれなはてそ秋の月このよをたにもやみにまとは  
し 藤原範永朝臣」(卷第十五 雜一)

用例七 九二四「わすれしといひ侍りける人のかれかれになりて  
まくらはことりにをこせ侍りけるに 玉くしけ身はよそよそに成  
ぬともふたり契ことなわすれそ 馬内侍」(卷第十六 雜二)

用例八 一〇三三「三条院東宮と申しけるとき法師にまかり成て  
宮のうちにたてまつり侍ける きみに人なれなならひそおく山に入  
ての後はわひしかりけり 藤原統理」(卷第十七 雜三)

用例九 一二〇一「二条院東宮にまいり給て藤つぼにおはしまし  
けるに 前ノ中宮のこの藤坪におはせしこなと思ひ出る人など侍

ければ 忍ひねの涙なかけそかく計せはしとおもふころの袂に 大  
式ノ三位」(卷第十九 雜五)

用例一〇 一一〇七「六条の左大臣身まかりて後播磨ノ国にくた  
り侍けるに 高砂のほとにて こゝはたかさことなんいふと舟人い  
ひ侍ければ 昔を思ひいつることやありけん よみ侍ける 高砂と  
たかくないひそ昔ききしおのへのしらへまつそ恋しき 源相方ノ朝  
臣」(卷第十九 雜五)

用例一一 一二五三「法師の色このみけるをよみ侍ける 常ならぬ  
山のさくらに心いりて池の蓮をいひなはなちそ 源重之」(卷十九  
雜五)

用例一二 一二六五「御かへし おく山にたきりておつる滝つせ  
の玉ちるはかり物な思ひそ この歌はきふねの明神の御かへしなり  
おとこのこゑにて和泉式部かみ、にきこえけるとなんいひつたへけ  
る」(卷第二十 雜六)

用例一三 一二三四「七月はかり月のあかゝかりけるよ 女のも  
とにつかはしける わすれてもあるへきものを此ノころの月よいた  
くなすかせそ 少尉藤原義孝」(卷第二十 雜六)

用例一四 一二五六「陸奥守則光藏人にて侍ける時 いもせなど

いひつけてかたらひ侍けるに 里へ出たらんほどに 人々の尋んに  
ありかなつけそといひて 里へまかりいて、侍けるを人々のせめて  
せうとなればしるらんとあるはいか、すへきといひおこせて侍ける  
返事にめをつつみてつかはしたりければ 則光心もえて いかにせ  
よとあるそとまうてきてとひ侍ければよめる かつきするあまのあ  
りかをそこなりとゆめいふなとやめをくはせけん 清少納言」  
(卷第十九 雜五)

用例六 三六三「きちかう あだ人のまがきちかうな花植へそに  
ほひもあへず折りつくしけり」（卷第七 物名）

用例七 五三四「賀茂にまうでて侍ける男の見侍て、今はな隠れ  
そ、いとよく見てき、と言ひをこせて侍ければ そら日をぞ君はみ

たらし河の水浅しや深しそれは我かは 伊勢」（卷第九 雜下）

用例八 五六七「かの岡に草刈る男しかな刈りそありつ、も君が  
来まさむみまくさに 柿本人磨」（卷第九 雜下）

用例九 七一七「むばたまの今宵な明けそ明けゆかば朝行く君を  
待つ苦しさに 人磨」（卷第八 雜上）

用例一〇 一〇〇九「天暦御時、大盤所の前に、鶯の巣を紅梅の  
枝に付けて立てられたりけるを見て 花の色は飽かず見るとも鶯の  
ねぐらの枝に手なな触れそも 一条撰政」（卷第十六 雜春）

用例一一一〇一七「延喜十五年、斎院屏風に、霞を分けて山寺  
に入る人あり 思事ありてこそ行け春霞道さまたげに立ちな隠しそ  
紀貫之」（卷第十六 雜春）

用例一二一二一「三百六十首の中に 秋風は吹なやぶりそ我  
が宿のあばら隠せる蜘蛛の巣がきを 躁恒」（卷第十六 雜春）

用例一三一三六三「一条撰政下臍に侍ける時、承香殿女御に侍  
ける女に忍びて物言ひ侍けるに、さらにな訪ひそと言ひて侍ければ  
契りし事ありしかばなど言ひ遣はしたりければ それならぬ事もあ  
りし忘れぬと言ひし許を耳に留めけん 本院侍従」（卷第十九 雜  
恋）

## まとめ

1 禁止表現の状況  
歌 二三例

○懇願の気持ちを含めて禁止すると解されるもの

用例二・四・八・九・一二

○禁止の意を表すと解されるもの

用例一・三・五・六・七（詞書）・一〇・一一・一三（詞書）

2 作者は、躁恒（用例一・一二）、よみ人知らず（三・三・五・  
六）、大伴坂上郎女（四）、伊勢（七）、柿本人磨（八・九）、一条  
撰政（一〇）、紀貫之（一二）、本院侍従（一三）である。よみ人  
知らずが四首で十三例中の三割を占める。

3 部立ては、春（用例一・一二）、夏（三・四）、秋（五）、物名  
(六)、雜下（七・八）、雜上（九）、雜春（一〇・一一・一二）、  
雜恋（一三 詞書）である。「雜」の部立てに多く、七例（詞書  
二例）である。五割三分を占める。

4 作者が懇願の気持ちを含めて禁止している対象は、人に對して  
詠んだもの六首、人（五）、物名（六）、女（七）、男（八）、大盤  
所前にいる人（一〇）、一条撰政（一二）、動物に對して詠んだも  
の二首、郭公（三・四）、自然に關するもの五首、霞（用例一・一  
一）、峰の白雲（二）、今宵（九）、秋風（一二）と多岐にわたる。

5 「いたくな鳴きそ」（用例四）の場合、形容詞「いたし」の連  
用形「いたく」を「な」の前に置いて詠み手の強い心情を表現  
している。また「さらにな訪ひそ」と「な」の前に副詞「さらに」  
をおいて強く禁止している。

6 「な……そ」を含む文節

- ① 「な」と「そ」の間に動詞の連用形をはさむもの 一一例
- ② 「な」と「そ」の間に、名詞と動詞の連用形をはさむもの  
「な手触れそ」
- ③ 「な」と「そ」の間に、文字を添えたもの 一例「手なな触れ

○懇願の気持ちを含めて禁止すると解されるもの

① 作者に苦惱、嘆きの心情、思いやり、あわれに思う余情、深く切々たる思い等があるために、かかわりのあるものに対しても制止の意を含みつつ懇ろに願い望む意があると解されるもの

用例一・二・四・五・七・八・九・一二・一四・一五

② 作者に事象の展開が予想できて、さらに制止の意を含みつつ

心情的に懇願する意があると解されるもの 用例三・一〇

③ 作者に關係のある動作が予定されているために、かかわりのあるものに制止の意を含みつつ懇ろに願い望む意があると解されるもの

用例五・一一・一三

○禁止の意を表すと解されるもの

用例六

2 作者は、大将御息所、はるみちのつらき、紀貫之、藤原清正、小八条御息所、贈太政大臣、在原行平朝臣、みつね、よみ人知らずである。一五首中七首は、よみ人知らずである。四割六分である。

3 部立ては、春中（二首）、春下（二首）秋中（一首）、冬（一首）、恋二（一首）、恋四（二首）、恋八（二首）、雜一（一首）、雜二（二首）、離別、羈旅（二首）である。

4 作者が懇願の気持ちを含めて禁止している対象は、延光朝臣（用例六二）、壬生忠岑（八〇）、伊勢（八三〇）、女（一〇四一）、鷹を飼育する役人（一〇七六）、男（一二八五）、旅にまかりける人（一三二八・一三三〇）等の人物が八首、動物は呼子鳥（七九）が二首、春の山風（二三二）、天の河霧（三三六）、霜枯れの枝（四七六）擬人化して呼びかけ）、なこそその関（六八二）「来るな」の意をかける）等の自然に関するものが四首である。詞書は、女

から作者に（一〇三二）、みつね（一〇八四）の二首であり、作者の呼びかけている対象は概して人と自然に関するものである。

5 「いたくなわびそ」（八〇）、「いたくな思ひわびそ」（一〇三二）と、副詞「な」の上に形容詞「いたし」の連用形「いたく」を置いて詠み手の強い心情を表現している。「古今集」と同数の二例

である。

6 「な……そ」を含む文節を見ると、「な……そ」の間に複合動詞が入るもの一例、カ変の未然形がは入るもの一例、二三例は連

用形である。

「な……そ」の間に動詞「わぶ」の入るもののが四例あり、作者の心情表現に好都合と思われる。

用例を抜き出すと「な告げそ」、「な鳴きそ」、「なわびそ」（三例）、「な乱りそ」、「な隠しそ」、「なこそ」、「な思ひわびそ」（詞書）、「な怨みそ」、「なとがめそ」、「な言ひそ」（二例）一例は詞書）、「な果てそ」である。

『拾遺和歌集』

用例一 一六 「斎院御屏風に 香をとめて誰折らざらん梅花あや  
なし霞立ちな隠しそ躬恒」（巻第一 春）

用例二 三八 「天暦九年内裏歌合に 咲き咲かずよそにても見む  
山桜峰の白雪立ちな隠しそ よみ人知らず」（巻第一 春）

用例三 一七 「題知らず 鳴けや鳴け高田の山の郭公この五月  
雨に声な惜しみそ よみ人知らず」（巻第二 夏）

用例四 一二〇 「郭公いたくな鳴きそひとり居て寝の寝られぬに  
聞けば苦しも 大伴坂上郎女」（巻第二 夏）

用例五 一六〇 「題知らず 白露の置くつまにする女郎花あなづ  
らはし人な手触れそ よみ人知らず」（巻第二 秋）

の

二八五・三六八・四五五

③ 「な」と「そ」の間に動詞と助動詞をはさむもの

三首

一四五

## 『後撰和歌集』

用例一 六一 「朱雀院の桜のおもしろきことと延光朝臣の語り侍りければ、見るよしもあらまし物をなど、むかしを思ひて 咲かず我にな告げそ桜花人づてにやは聞かむと思し 大将御息所」  
 (卷第一 春中)

用例二 七九 「よぶこどりを聞きて、隣の家の贈り侍ける わがやどの花にな鳴きそ喚子鳥よぶかひ有て君も来なくに はるみちのつらき」(卷第三 春中)

用例三 八〇 「壬生忠岑が左近の番長にて 文おこせて侍けるついでに、身をうらみて侍ける返事に ふりぬとていたくなわびそ春雨のただに止むべき物ならなくに 紀貫之」(卷第三 春中)

用例四 一三一 「題しらず 鶯の糸に撫るてふ玉柳吹きな乱りそ春の山風 よみ人も」(卷第三 春下)

用例五 三三六 「八月十五夜 秋風にいとゞふけゆく月影を立ちな隠しそ天の河霧 藤原清正」(卷第六 秋中)

用例六 四七六 「霜枯れの枝となわびそ白雪の消えぬ限は花とこそ見れ よみ人も」(卷第八 冬)

用例七 六八二 「寛平のみかど御ぐしおろさせたまうての頃、御帳のめぐりにのみ人はさぶらはせたまうて、近う寄せられざりければ書きて御帳に結びつける 立ち寄らば影踏む許近けれど誰かなこそその関をすへけん 小八条御息所」(卷第十 恋二)

用例八 八三〇 「伊勢なむ人に忘れられて嘆き侍」と聞きてつ

かはしける ひたぶるに思なわびそ古さる、人の心はそれぞ世の常  
贈太政大臣」(卷第十一 恋四)

用例九 一〇三 「女のもとより『いといたくな思わびそ』とた

のめおこせて侍ければ慰むる言の葉にだにか、らずは今も消ぬべき露の命を よみ人しらず」(卷第十四 恋八)

用例一〇 一〇四 「返し 越えぬてふ名をな怨みそ鈴鹿山いと、間近くならんと思を よみ人しらず」(卷第十四 恋八)

用例一一 一〇七六 「おなじ日、鷹飼ひにて、狩衣のたもとに鶴の形を縫ひて、書きつけたりける 翁さび人なとがめそ狩衣今日許とぞたづも鳴くなる 在原行平朝臣 行幸の又の日致仕の表たてまつりける」(卷第十五 雜一)

用例一二 一〇八四 「『我を知り顔に、な言ひそ』と女の言ひて侍ける返事に 菖引の山に生ひたるしらかしの知らじな人を朽木なりとも みつね」(卷第十五 雜一)

用例一三 一二八五 「返し ひとふしに怨な果てそ笛竹の声の内にも思ふ心あり よみ人しらず」(卷第十六 雜二)

用例一四 一二三八 「旅にまかりける人に装束つかはすとて、添へてつかはしける 袖濡れて別はすとも唐衣ゆくとな言ひそ来たりとを見む よみ人しらず」(卷第十九 離別 羁旅)

用例一五 一三三〇 「旅にまかりける人に扇つかはすとて 添へてやる扇の風し心あらば我が思ふ人の手をな離れそ よみ人しらず」(卷第十九 離別 羁旅)

## まとめ

1 禁止表現の状況

歌 一三例

詞書 二例

一五例

とがめそ よみ人しらず」（巻第四 秋歌上）

用例一二 二六六「是貞親王家歌合の歌 秋霧はけさはな立ちそさほ山の柞のもみぢよそにても見む よみ人しらず」（巻第五 秋歌下）

用例一三 二八五「恋しくは見てもしのばむもみぢばを吹なちらしそ山おろしの風 よみ人しらず」（巻第五 秋歌下）

用例一四 五〇「題しらず 山高み人もすさめぬさくら花いたくなわびそ我見はやさむ よみ人しらず」（巻第一 春歌上）

用例一五 四五五「梨 薺 胡桃 あじきなし嘆きな詰めそ憂き事にあひくる身をば捨てぬものから 兵衛」（巻第十 物名）

## まとめ

### 1 禁止表現の状況

#### 一五例

○懇願の気持ちを含めて禁止すると解されるもの

#### 一四例

① 作者が心情的になんらかの苦境にあるために、他に対しても制

止の意を含みつつ懇ろに願い望む意があると解されるもの

用例一・二・三・四・五・六・七・八

② 作者になんらかの関係のある動作が予定されているために、他に對して制止の意を含みつつ懇ろに願い望む意があるものと解されるもの

用例九・一〇・一一・一二・一三

③ 作者が心情的に對象と同じような情況にあるために、制止の意を含みつつ他に對して懇ろに願い望む意のあるものと解されるもの

用例一四 ○禁止の意を表すと解されるもの

用例一五

2 作者は、十五首中十首が「よみ人しらず」である。残り五首の作者は、藤原忠房、友則、忠岑、躬恒、兵衛である。「新古今和歌集」は十九首中の二首が「よみ人しらず」である。

3 部立ては、春歌（用例九・一〇・一四）夏歌（二）、秋歌（三・一・二・三）、離別歌（三）恋歌（四・五・六）、物名（一五）、雜体（七・八）である。物名の歌のみが「禁止の終助詞（な）」に通うものになっている。

4 作者の懇願の気持ちを含めて禁止している対象は、十五首中に、

「人」（春日野の番人一例、世間の人三例、関所の番人一例、誰かに贈った歌一例、心を寄せている女一例）に対して作者の心情を詠んだものが八首、動物（郭公、猿）に関するもの二首、植物（さくら花、山ぶき）に関するの二首、自然に関するもの（朝霧、山おろしの風）二首、昆虫（きりぎりす）に関するもの一首。

「人」に対しても、作者の素朴な心情を飾らずに詠んだ歌が五割余りである。

5 形容詞「いたし」の連用形「いたく」をともなうものが二例（「いたくな鳴きそ」「いたくなわびそ」）あり、作者の心情を強く表現することになる。

6 「な……そ」を含む文節を見ると次の三通りにまとめることができる。

① 「な」と「そ」の間に動詞の連用形をはさむもの

一七・五〇・一二三・一九六・二四六・二六六・五〇八・六六七・八二二〇三六・一〇六七

二二首

② 複合動詞の間に「な」がはいり、そして「そ」が下接するも

# 八代集の禁止表現（「な……そ」）

田 中 司 郎

## はじめに

日本古典文学の禁止表現（「終止形・な（終助詞）」・「な（副詞）」・連用形・そ（終助詞））を把握する過程で八代集の禁止表現の用例の収集と検討を試みてきた。

今回は『古今和歌集』『後撰和歌集』『拾遺和歌集』『後拾遺和歌集』『金葉和歌集』『詞花和歌集』『千載和歌集』『新古今和歌集』の禁止表現（「な……そ」）を集約して、歌、詞書の中に述べてある禁止表現の状況、「な……そ」を含む文節や占める割合、「な……そ」を含む文節前後の心情を表わすことば、作者の禁止している対象、部立て等を確かめながら和歌の読みをさらに深めたい。歌番号は『新編国歌大観』に従う。

「な（副詞）・連用形・そ（終助詞）」

### 『古今和歌集』

用例一 一四五「題しらず 夏山に鳴郭公心あらば物思我にこそ  
な聞かせそ よみ人しらず」（卷第三 夏歌）

用例二 一九六「人のもとにまかれりける夜、きりぐすの鳴き  
けるを聞きて、よめる きりぎりすいたくな鳴きそ秋の夜のながき  
おもひは我ぞまされる 藤原忠房」（卷第四 秋歌上）

用例三 三六八「小野千古が陸奥介にまかりける時に、母の、よ  
める たらちねの親のまもりとあひ添ふる心許はせきなどめそ  
よみ人しらず」（卷第八 離別歌）

用例四 五〇八「いで我を人などがめそ大舟のゆたのたゆたに物

思ころぞ 読み人しらず」（卷第十一 恋歌二）

用例五 六六七「下にのみ恋ふればくるし玉の緒の絶えてみだれ  
む人などがめそ 友則」（卷第十三 恋歌三）

用例六 八一二「それをだに思事とてわが宿を見きとな言ひそ人の  
聞かくに よみ人しらず」（卷第十五 恋歌五）

用例七 一〇三六「隠れ沼の下より生ふるねぬなはのねぬなは立  
てじくるないとひそ 忠岑」（卷第十九 雜体）

用例八 一〇六七「法皇、西河におはしましたりける日、猿、山  
の峠に叫ぶと言ふことを題にて、よませ給うける わびしらに猿な  
なきそあしひきの山のかひあるけふにやはあらぬ 脊恒」（卷第

十九 雜体）

用例九 一七「春日野はけふな焼きそわか草のつまもこもれり我  
もこもれり 読人しらず」（卷第一 春歌上）

用例一〇 一二三「山ぶきはあやなな咲きそ花みんと植へけむき  
みがこよひ来なくによみ人しらず」（卷第一 春歌下）

用例一一 一二六「百草の花のひもとく秋の野に思たはれむ人な